

第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書

特別賞候補

瀬戸内国際芸術祭の島を再生する活動の功績について

対象者

瀬戸内国際芸術祭実行委員会

概要・推薦理由

「瀬戸内国際芸術祭」は、瀬戸内の島々を舞台に、3年に一度開催される現代アートの祭典。2010年の初開催から今回で6回目を迎え、15年の歴史を重ねてきました。国内外から約100万人が訪れる、日本を代表する国際的な芸術祭です。

春・夏・秋の季節にわたり107日間開催され、瀬戸内の魅力が体験できます。瀬戸内の自然、歴史、地域文化、そして島々で営まれる暮らしにインスピレーションを受けた、国内外の多様なアーティストによる作品を巡りながら、地域の人々との交流や美しい景観との出会いを通して、瀬戸内の魅力を五感で体感できます。

また、過疎化が進む瀬戸内の島々に、現代美術の力で新たな息吹を吹き込むことを目的としており、その成果としてIターン・Uターンによる移住者が増加し、休校していた小中学校の再開に至った例もあります。

さらに注目すべきは、芸術祭を支えるサインや情報ツール、作品解説、船着き場や船などに見られる統一された優れたデザインです。これらは来訪者の理解や移動を円滑にするだけでなく、地域住民自身の気づきを促し、来訪者との新たなコミュニケーションのきっかけともなっています。

島とアートが“サイン”となり、多くの人々を惹きつけている本芸術祭の取り組みは、「海の復権」という大きな成果を生み出しつつあります。その功績を、心から讃えたいと思います。

推薦者

四国地区 大川原誠人



1



2



3



4



5

1. <https://setouchi-artfest.jp/place/>

3. ヘザー・B・スワン+ノンダ・カサリディス「海を夢見る人々の場所」 Photo: Keizo Kioku (瀬戸内国際芸術祭作品)

5. ワン・ウェンチー[王文志]「ゼロ」 Photo: Keizo Kioku (瀬戸内国際芸術祭作品)

2. 青木野枝「空の玉／寒霞溪」 Photo: Keizo Kioku (瀬戸内国際芸術祭作品)

4. 淀川テクニック「宇野のチヌ」 Photo: Osamu Nakamura (瀬戸内国際芸術祭作品)

第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書



男木小学校の入学式

特別賞候補

瀬戸内国際芸術祭の島を再生する活動の功績について

2014年4月、瀬戸内海に浮かぶ男木島^{おぎしま}（高松市）に瀬戸内国際芸術祭により、3世帯の家族がUターンしたことをきっかけに、休校していた高松市立男木小学校と中学校が6年ぶりに再開しました。人口170人の男木島では、2002年に男木保育所が休所し、2008年の小学校休校に続き、2011年には中学校も休校。島から子どもの声が聞こえなくなっていました。男木島で育った福井大和さんは、瀬戸内国際芸術祭に家族ぐるみで関わるうち、小学5年生だった娘の後押しで、大阪からのUターンを決意。第2回瀬戸内国際芸術祭が開催された2013年秋まで

に、福井さん家族を含む4世帯の移住希望者（未就学～中1まで子ども11人）が、881人の署名と学校再開の要望書を高松市に提出。2014年4月から6年ぶりに小学生4人、中学生2人が通う男木小中学校が仮設校舎で再開。高松市は4～12歳の子供8人が島で暮らすことになったことから2013年10月、地元から要望を受け再開を決定。小学校には6年ぶりに児童4人、中学校には3年ぶりに生徒2人が通っています。



伊吹の樹 栗林隆

第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書



タコツボル TEAM男気

特別賞候補

瀬戸内国際芸術祭の島を再生する活動の功績について

豊島の方と来島者を繋ぐプラットフォームとなる「島キッチン」のテラスで毎月開催しているプログラム。

お誕生月を迎える方を、豊島の方や来島者と一緒に祝いし交流する。お誕生会にはパフォーマーが登場したり、ワークショップがあったりとお年寄りから子どもまで楽しめ、2014年4月から毎月開催しています。

島内の方も、島外からいらした方も、誕生月の方も、誕生月でない方も参加し交流が生まれています。

瀬戸内国際芸術祭の会場である島々には基本的に船(フェリー・高速艇)でしか渡れません。島とアートを求めて乗船しゆっくり波に揺られて向かいます。目的の島を目の前にすると、普段の生活では経験出来ない懐かしさと初めて見る異空間が広がります。そこには、島に暮らす人達の生活や時間の流れが、訪れた人達の心に癒やしの様に響くような気がします。

島で暮らす人達は会期中、港で旗を振り船をお迎え、そして見送ります。



第59回 日本サインデザイン特別賞 推薦書

特別賞候補 瀬戸内国際芸術祭の島を再生する活動の功績について



1

昭和37年まで男木島では春の鯖漁に合わせて「大漁躍り込み」が行われていました。「躍り込み」とは漁船いっぱいには鯖が捕れた時、大漁旗を掲げ、2艘の舟を結わえて(連結して)柄杓や薪を打ち鳴らしながら「うお～さらい、うお～ほ～ん」とかけ声をかけ歓びながら港に帰ってくる男木島伝統の風習です。

この「躍り込み」を2013年から2019年まで瀬戸内国際芸術祭で地元のアーティストグループ「TEAM男気」によって再現されました。もうその漁場は失われ漁の仕方も変わってしまいその風習はなくなりましたが、島の漁師さん達は良い時代であつた昔を思い出し、涙を流し喜びました。

映像

<https://www.youtube.com/watch?v=s62deMGdA-U&t=12s>

https://www.youtube.com/watch?v=aAmTtanV_y8



2

躍り込み TEAM男気



3

男木島パビリオン 大岩オスカル



4

はじまりの刻 三宅之功

Liminal Air -core- 大巻伸嗣



男木島の魂 ジャウメ・プレンサ



近年、芸術祭というアートイベントは全国的にブームとなり、各地で開催されるようになりました。瀬戸内国際芸術祭は、その先駆けとも言える存在であり、現在でも最も成功した芸術祭の一つではないでしょうか。

瀬戸内国際芸術祭は、「こえび隊」というボランティアが底支えをしています。主に訪れた人達のチケットのチェック、作品や島の案内を行います。作家のアシスタントして作品作りにも協力しています。今では男女年齢国籍に関係なく多国籍なこの「こえび隊」が人と人をつなぎ、訪れる人々を導くサインとしての機能の大切な役割を果たしています。

島の持つ魅力やアート作品のような「もの」だけではなく、島の人々の交流やボランティアの行為までもが瀬戸内国際芸術祭を盛り上げています。期間中、各島々ではいろんなイベントや催しが計画されています。人を結びつける「こと」が予想しなかった成果を生み続けることでしょう。

人を引きつけ結びつけ、導くサインとして見ても、瀬戸内国際芸術祭から目が離せません。

ゼロ ワン・ウェンチー

フェリー めおん2